

哲学の対象

加藤 正

『自揚』の一月号に秋澤兄が書かれている。『哲学に諸科学と異った独特の対象と独特の方法を指定し、哲学を個別諸科学の上に君臨せしめることは、哲学および科学の発展を阻止せんとする観念論的企図である。』

哲学は個別科学と別個のものを研究するのではないとすれば、哲学と科学という二つの学問は何故必要だろうか。必要ないからこそ哲学は不要となる。止揚しやうされる。『哲学はただ全体的な科学的認識である』と言われるが、個別諸科学が世界の全聯関を明かにする場合、それと別に、全体を認識する哲学は不要である。個別科学に対する普遍科学は不要である。『哲学と科学とは本来統一されたもの』でなく、科学の発展によって不必要になったのだ。『個別科学的認識は哲学に対してつねに素材たり』、この素材に基いて世界を全体的に認識するのが哲学なら、僕にはやつぱり秋澤兄が科学の上にか下にか、とにかく実証的経験的科學を越えた、その及ばないところを認識する哲学なるものを認めて居られるように思える。科学で認識できる筈なのに、科学のこなし得ない全体の領域を設定して哲学でそこを征服しようというのは、観念論でないだろうか。またそれは必然に科学と方法を異にしないだろうか。

それでもなお哲学の対象として残っているものがありとすれば、純粹思惟の法則だ、とエンゲルスは哲学の対象を規定した。科学は実在世界を認識する。哲学にもし研究すべき対象が残っているなら実在世界でなく、それを認識する科学そのものが対象である。実在の運動法則を研究するのが科学であり、科学の運動法則即思惟または人間

頭腦の全運動の法則を研究するのが哲学（論理学、弁証法）であり別名認識論である。僕はこう信じている。實在世界の歴史の研究が自然科学、社会科学と呼ばれるように、その『世界の認識の歴史』の研究が哲学的科学である。哲学は、個別科学と並んで、立派に一個の特殊な対象をもっている。それはその対象を普遍的にばかり研究するという独特の方法を持たないで、個別科学が自己の対象（自然および歴史過程）を研究すると同様の方法で自己の対象（人間の認識過程）を研究する。

唯物論における哲学の問題を論ずるお約束をして一年になるがまだ果せないでいるので、この問題に注意だけ向けました。吉田兄も野心のありそうな口振だったが、大いに期待したい。

一・一八

（『唯研ニュース』第六四号、一九三七年二月）

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{mx}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。